

丙午紀行 地

160  
94

160-94



\*1200901383594\*

# Kodak Gray Scale

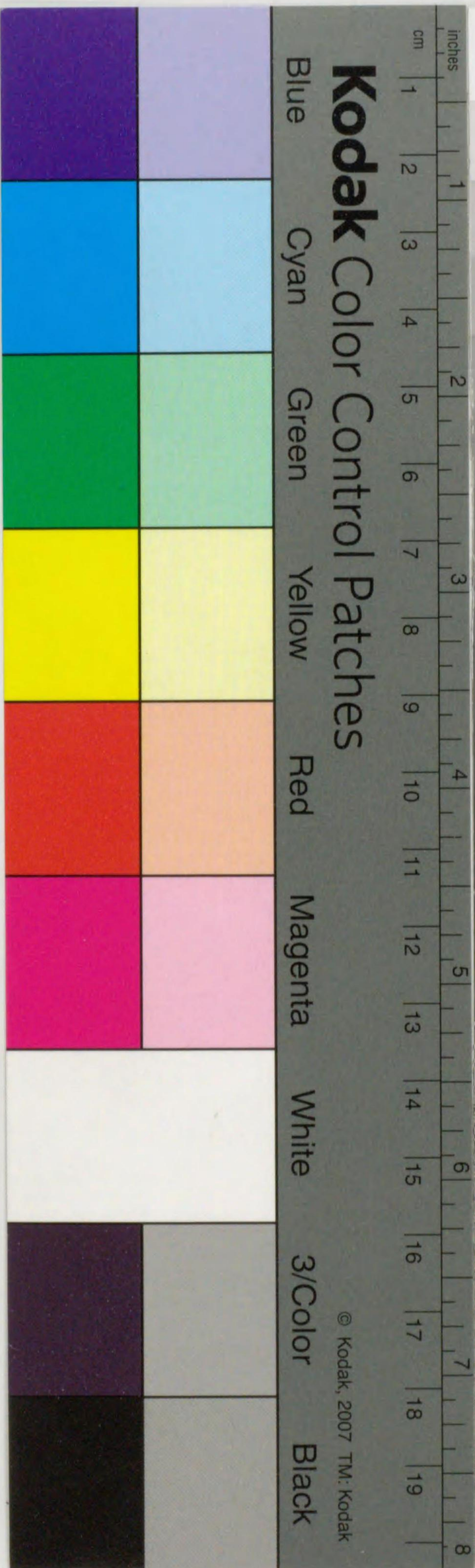
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

# Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

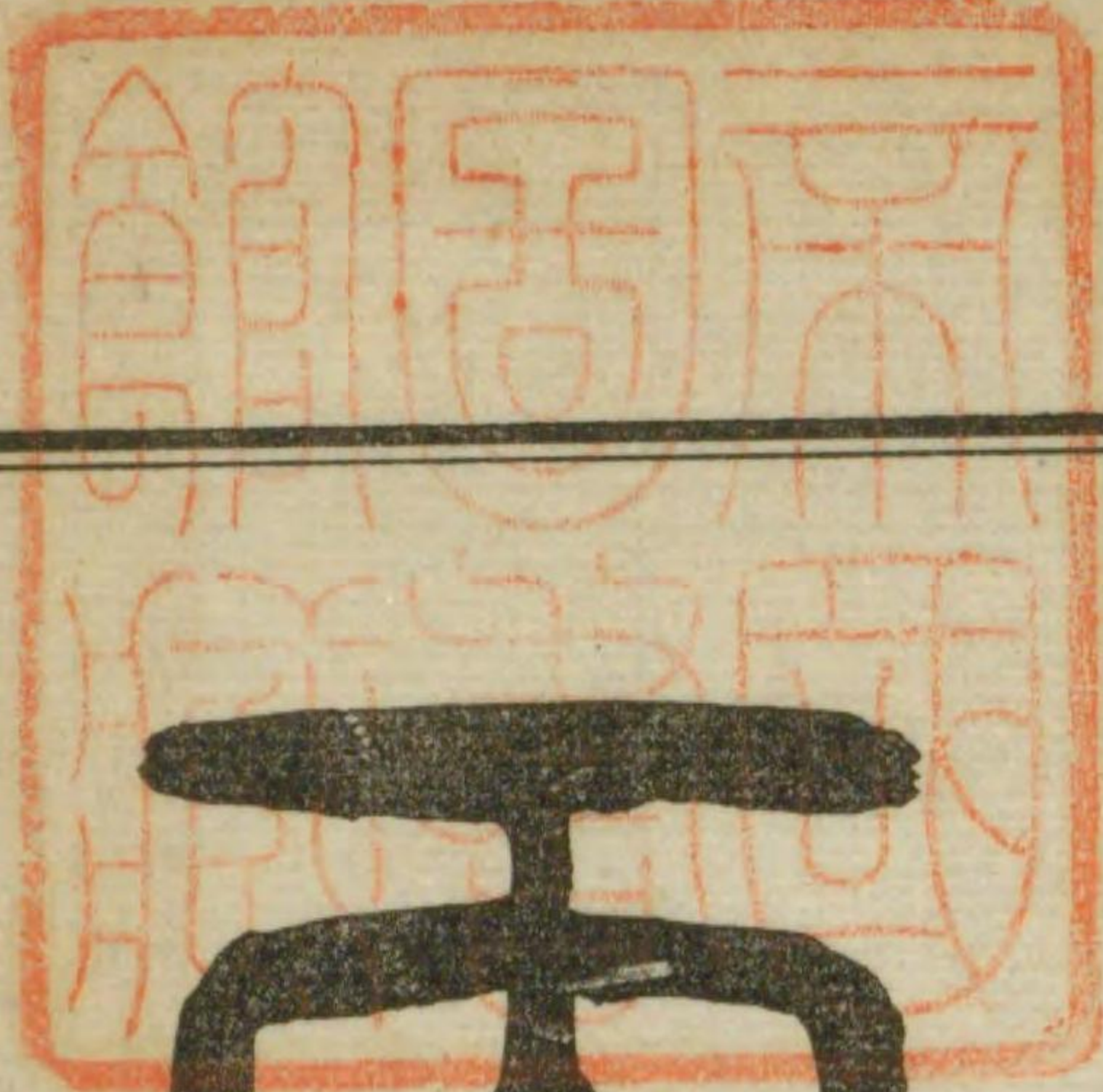


丙午紀行

地



160-94



兩本紀行

竹山隸古

大正  
11. 12. 15  
内交

頁	丙午紀行(地)正誤
一 二 三 五	
行	
八 二	
誤	
入	
山	
延	
正	
入	
山	
(延)	



丙午紀行

自藝州  
至本藩

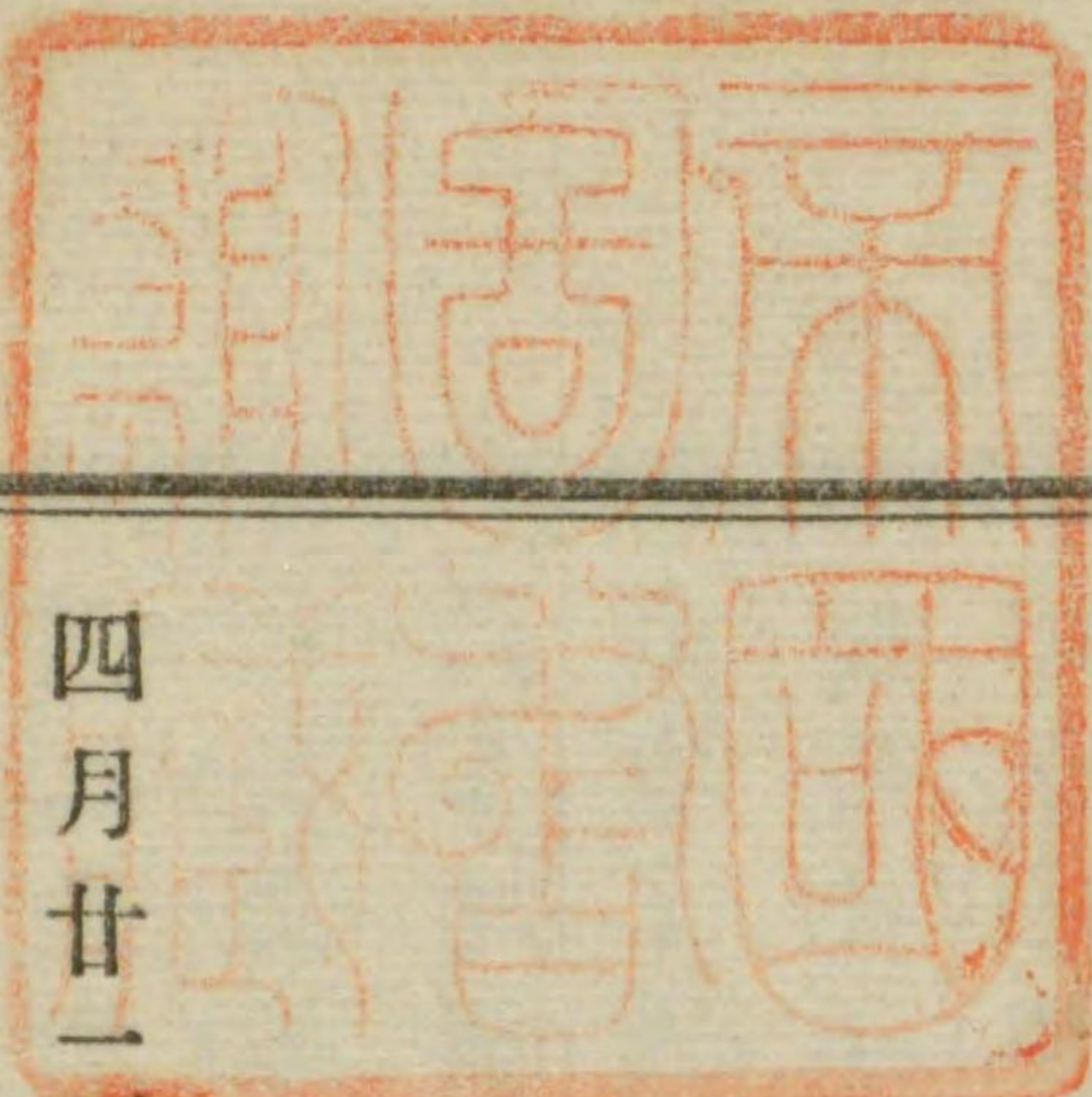
陸奥 桃園 佐藤脩亮 著

嫡孫 佐藤 密校

地

四月廿二日曇八つ頃より快晴

五つ頃案内を乞亭を出て嚴島へ詣す、當所は所謂扶桑三景の一にして、四方の文雅騷人舌を捲くの勝地也、先其大槩を記すに、社前海面に大鳥居あり、楠の全木にして高さ五丈八尺六寸圍り二丈三尺笠木十二間、表に嚴島大明神裏に伊都岐島大明神の額あり





り、各豎九尺横五尺。後奈良院の勅額之、左右の廻廊百八間にし  
て百八の金燈籠海面左右にも百八の石燈籠あり、潮満れば水面  
に映し、佳景いふ斗なし、左の廻廊に客人の神社傍に鏡池俊寛卒  
都婆石等あり、治承元年六月成經及康頼僧俊寛流于鬼界島と原  
文に朱註せり、右の廻廊に天満宮大黒天能舞臺あり、廻廊の天井  
に後藤基次の筆にて日城巡國後藤又兵衛と落書あり、正面本社  
にして狩野古法眼元信の三十六歌仙の額をはしめ諸名家の額  
面數ふるに違あらず、左に豊太閤御造營の大厦正面に釋迦如來  
を安置す、世に千疊敷といふ是之、傍に大内義隆寄進の五重の塔  
あり、一切經堂二つ是亦同寄進なり、湯立堂書肆には徵明の書に  
て名山藏とあり、左右の縣は肥州雪山の筆なり、平判官康頼寄進  
の石燈籠後に本地十一觀世音右に大元の社、神主棚守將監別當

二ヶ寺眞言宗にして瀧山大聖院龜居山大願寺と云庭前に古松  
あり、小松三位重盛の植し、所といへり、治承三年秋八月薨年四十  
三と原文に朱註せり、社領千石後の方高山は奥の院にして彌山  
といへり、麓より坂路十八丁にして嶮岨なり、左の路傍に懺悔地  
藏、祈不動、火防不動、瀧の宮、白糸の瀧あり、十五丁にして二王門絶  
頂より僅下に大日堂あり、福島正則造營といへり、後の方にヒセ  
ン石、舟石、奇石數々あり、目洗の薬師と云あり、傍の石に凹なる處  
ありて潮の満干有といへり、嘗るに味鹹し、愛宕の飛杉正月六日  
龍燈ありといへり、絶頂を少々下り岩屋の不動毘沙門堂あり、堂  
内の額は亞聖鄒國公六十代士武撰と有り、清朝より奉納といへ  
り、傍に鐘あり、治承元年丁酉二月日施主右大將平宗盛と鐫す、三  
丁程下り奥の院にして虚空藏を安置す、庭前に錫杖の梅時雨の



櫻杯いふあり、左の方に一山の守護三鬼神の社あり、元の道に出  
 麓に下り旅亭へ戻り八つ頃旅装を束ね便船を得て廣島に赴く、  
 海上左の方に地の御前と云社あり、嚴島御旅處にして毎年六月  
 十七日の祭禮には神輿船中管絃にて本社へ渡御ありと云へり、  
 廿日市の浦を過汐時あしく廣島へ着船成りかたく、海路四里井  
 の口と云處に着船し、草津の驛を過、廣島の城下に達す、府に入橋  
 二つあり元安川といへり、城は右の方にあり、城下甚よろし、然れ  
 ども、國用乏しく、札通用にして價定らず、士民難澁して、甚不景氣  
 なり、此邊より端午の幟を當時より立たり、城主松平藝州侯采地  
 四十二萬六千石、客舎伊豫屋惣八行程海陸五里。

宮島にて時鳥を聞て

○うき旅の身のなくさめの時鳥

島めぐりして初音をそなく

廿三日天氣晴朗

明半時出宿、城下を出て、左の方に饒津明神の社あり、先主淺野長  
 政を祀ると云へり、十一二年前新に經營のよしにて、普請結構を  
 盡せり、別當明聖院右の方僅隔て、東照宮の御宮石の華表唐門  
 廻廊御拜殿御本社彩色にして美麗なり、別當長尾山松園院夫よ  
 り舟越と云處に至る、二丁斗東に可兒才藏の墓あり、標石を立た  
 り、貝田に至る此所街道より道を右に取三ツ石に赴く、矢野熊野  
 内の海を過行程十一里にして三ツ口に達す、舟宿千藏屋幸助當  
 所より舟を雇ひ暮少々過出船す、此間安藝備後の境、三原を左  
 に取海路十三里翌朝明半頃尾の道に達す、商船着岸の津にして  
 繁昌の地、行程海陸二十四里。



廿四日天氣晴朗

同朝直に旅装を束ね出立、町内左脇に八幡の社あり、町を出て三丁程行、左に西國寺といふ眞言宗の大寺あり、程なく藝州領福山領の境にして、双方共に番所あり、今津の驛を過て右に福山の城見ゆる、阿部勢州侯采地十萬石の城下之、大渡り川を過て石州と福山への別れ道あり、今泉に至り神苗の宿を経て備後備中の境之、此所にも福山の番所あり、上出郡を過七日市に至り宿す、吉屋榮吉行程十二里。

廿五日天氣吉

明半時出立、町出口に川有り、此所一橋様御領所にして左の方に陣屋あり、今市を過て矢掛に至る、入口に矢かけ川あり、此宿にてゆべしを産す極めて上品なり、驛を出て街道より三丁斗左の方

に吉備公の墳あり標石を立たり、間もなく岡田伊東播州侯の陣屋あり、河邊に達す、町出口に川あり、舟渡しなり、三軒屋に至る、左の方に國分寺といふ禪刹ありて境内に五重の塔あり、藝州より備後備中山林樹木なく小松のみなり、備中別て土地悪し鐵を國産す、板倉に達し三丁斗右の方に當國一ノ宮吉備津の宮あり、隨臣門唐門廻廊本社拜殿頗る結構なる大社之、神宮三日市長門守社前の町を宮の内と云ふ、市居甚よろし當所に宿す、花屋きぬ行程十三里。

廿六日終日雨降

明半時出宿、間もなく備中備前の境なり、道の左に備前一の宮吉備津の宮あり、隨分大社之、二里にして岡山の城下に達す、城主松本豫州侯采封三十一萬五千石商船往復あり、又伯州へ川舟上下



あり、城下市塵よろしく賑ひ藩士の第宅よろしく田圃ひらけ城下出口右の方に羅漢寺あり、矢かけに至り八市を経て川有り舟渡しにしてよしの川といへり、右の方に長船村あり刀劍を製す、助定の末葉の第宅尤よろしく見へたり、かゝとを過て員べに至る此處、家毎に陶器を産す、備前焼是なり、片上に達し宿す、旅宿惠美須屋林治行程九里。

廿七日天氣快晴

明半時出宿、三ツ石に至る、驛を出て坂あり峠に備前播磨の境あり、梨子ヶ原といふ處を過て有年に達す、當所に赤松信濃守則資三男本郷掃部介直頼居す、有年の古城の跡有り、赤穂への別れ道あり、此所より三里といへり、驛の出口に有年川舟渡しなり、此處より二里斗北赤松の庄河野村に赤松圓心の墓あり、標石を立た

り鶴龜といふ處に至る、左右に鶴屋、龜屋の茶店ありて、赤穂名産花燒鹽同所花岳寺より出る處の淺野義士等墨迹の石摺を商へり、藝州より此邊農家牛を畜へり、片島に達す、客舎正條屋彌三七行程九里半。

廿八日天氣曇七ツ半頃より雨降

明半頃出宿、町の出口に川有り、正條川舟渡しなり、左の方に龍野の城見ゆる、五萬石脇坂淡州侯の城下なり、あそ川を越かるとまい鶴、小田を過て笹葉峠とて小坂あり、青山川を越てのをに至る、此處に因州への別れ道あり、姫路に達す、(天正九年秀吉築播州姫路城と原文に朱註せり)城主酒井雅樂侯采封十五萬石城は左の方、天守巍然として市井軒をならへ、殷盛なり、草細工を産す、書寫山への道あり、出口に市川といふ舟渡しあり、御着に至る小寺藤兵



衛政職の居城に遺跡あり、福井を過豆崎に至り往還より道を右に取り十八丁にして曾根天神に至る、延喜元年菅公筑紫へ謫遷の時當處伊保の湊へ御船を寄せ給ひ、社より一丁西檜笠の岡にて四方の絶勝眺望有りし故此宮を檜笠の天神とも申奉る、天正六年豊臣秀吉公の再營といへり、樓門の額は曼珠院二品親王の御筆、攝社多く神殿巽の方に曾根の松といふ名木あり、菅公御息憇の時松の苗を御手つから植給ひ、我に罪なくは榮ひよと祈り給ふに、繁茂ししかも蟠龍の形あり、枝幹は土を去る事僅かに三四尺象獸地をかけるか如し、南北に流れ東西にわたり株のめく一丈八尺高さ一丈良の方より坤の間二十間斗り乾より巽の間十二間餘、其餘四方へたれて偃蓋の如し、又風雪の爲に折れ裂ん事を恐れ、枝枝柱を以て支ふ事百を以て數ふ、磷磷釘頭の如く

翠綠鬱鬱として神の靈木たりしか、惜哉近年枯れてみき斗殘れり、魚崎といふ處より道を左に取二十丁斗にして石の寶殿に詣す、靜岩屋とも稱し、石殿を以て神體とす、大さ一丈八尺高さ二丈六尺すへて社壇の形に造りたるを横に倒したる、一石以て作りなしたるは元より此地は近國の名物龍山石を産する山にして、寶殿も一個五十餘丈の石山を中を切抜き造りたる、上になりたる所には自ら土留りて松を生す、めぐり窪くして水溜り池の如し、大已貴少彦命一夜に御造營と社傳にあり、山上より播磨瀧兵庫大阪を遠望し奇絶の景地、巽の方の石山南面に觀濤處の三字の大字石あり、東都永井氏の書する處にして大字を能くす、一字五尺有餘、荒井川の舟涉しを越て、高砂に達す、西の方入口に圓光大師の御遺品寶瓶山十輪寺と云寺あり、貴僧門の額は智



恩院宮一品峯法親王の御染筆之、境内に水主九十六人溺死の石塔婆中央に寶篋院塔あり、高麗佛と稱す、元祿元年豊臣秀吉公朝鮮征伐の時高砂より水主百人を召さる歸陣の時百人の内九十六人溺死す、よつて永世高砂の地子を御免役有て今に然り、高砂の社へ詣す、石の鳥居樓門正面に能舞臺右の方に相生の松あり、枝葉鬱蒼として繁茂せり

○ちりうせぬ例しや幾世深みとり

名も高砂の松の行末

森森たる社地にして、社前海面にして則高砂の浦是之、當所は諸國の通商大場の湊となりて大厦つらなり、上に川あり下に海あり、萬船の出入に便りよく遠く交易し本邦出群の名所なり、當所に宿す、旅亭つり屋伊七郎行程九里。

廿九日雨降晝より晴

明半頃出立、八丁斗にして尾上に至る、祠るところ住吉の神なり、社の巽に相生の松あり、天正の頃秀吉公三木城別所小三郎を責る時、小三郎救を毛利輝元に乞ふ、即ち藝州より小早川隆景、吉川元春兩大將にて總軍一萬餘騎兵船二百餘艘明石郡魚住の浦に着、糧を三木城へ運送の後詰の爲に總軍今の尾高砂の邊りに陣を取てかの松を伐りて篝とす、夫より枯て慶長九年池田輝政の沙汰として粘根の上に神祠を移し、左方に鐘樓を建後年又祠を乾に移し枯根は神職の家に納てあり、偕鐘は甚異形にして古物典雅の珍器なり、是全く漢製にして日本の物にはあらざるよしなり、龍頭の傍に竹管の形を付たり、上に乳子ちちこなく、天人樹木座其餘樟様等の鑄付は刀田山鶴林寺の古鏡浪花長柄霍滿寺の古鐘



三所共に等しく、其大ききさも似たりといへり、其内長柄の鐘は長門國の堤普請の節掘得て、即長門國厚東郡守部郷松江山普濟禪寺永和五年己未仲呂日と鑿付て其寺にかけたりしか、故有りて浪華に送る處にして、裾に大平十年の年號をぼろに見得たり、是西晋二世惠帝の時にして、日本寛政九年迄千三百九十九年又後銘の日本の永和五年よりは四百餘年之、されは尾上刀田山の二鐘と共に千四五百年來の物とみへたるよし、近邊林の田の中に石船と云あり、俗にあまのつり舟といへり、其故をしらす、むかしの石棺の蓋なるへしといへり、六七丁西北に當て刀田山鶴林寺聖靈院といふあり、七堂伽藍にして寺内廣大之、聖德太子御創草にして太子二歳同十六歳同四十二歳三影合體の尊像にして、即太子の御頂の髮を植させ給ふ故に世植髮の太子と稱し奉る

よしなり、創建の本願は武藏國大目身人部春則之、一千有餘年の星霜を経ぬれば破壊して天正元年當國三木城主別所長治の再營なりといへり、夫より別府に至る處の路傍安田村といふに天満宮あり、濱の宮とも稱す、別府に達す、本社住吉神社なり、神前右の方に手枕の松と云あり、是又名木なり、めぐり一丈餘南北四十五步、東西三十步程、幹は猛虎の蹲踞の如く、枝葉は臥龍に似たり、西島を過て長濱と云處に出つ、是官道なり、金ヶ崎、大久保の驛を過て明石に達す、入口に明石川有り、城主松平兵部侯采地八萬石、城は左の方にあり、南は市店海邊に至り、商船交易多く、町は繁昌すといへとも要害始諸士の第宅よろしからず、城下中程より左に入忠度の塚並に腕塚あり、三丁計り北にして柿本人麿社之、歌道の聖神と崇めてかしこくも代々の帝王奉幣並に御製を賜はる、



享保年中正一位贈號あり、(聖武天皇天平元年柿本人丸卒スト人丸石見國ノ人也不審其父祖以和歌著於世卒スル時詠和歌云イハミノヤタカツノヤマノコノマヨリウキヨノツキヲミハテツルカナと原文に朱註せり)社前に盲杖の櫻人丸の碑銘あり、盲杖の櫻はむかし筑紫より來りし盲人の詠みしとて

○ほのくくと誠あかしの浦ならは

我にも見せよ人丸の塚

碑は寛文四年庚申明石城主松平日向守信之建と有り、文は林道春是を撰書す、別當を月照寺と云へり、明石の浦は郡中海邊の總名にして社前よりの眺望甚よろし、舞子の濱に至る、此邊砂殊に白く、數千株の松に高低なく梢を等ふして丈に不過、枝幹屈曲おのつから見處あり、前に淡路横はり後に小山すゝき一奇觀の勝

地なり、舞子焼とて風流の陶器を産す、たるみ村に達す、入口左の方に仲哀天皇の御陵あり、三ノ谷二ノ谷を過て界川といふあり、播摩攝津の境にして一の谷なり、(元暦元年春二月範頼義經陷一ノ谷城と原文に朱註せり)街道左脇に太夫敦盛の五輪あり、鐵拐ヶ峯ひよ鳥越安德帝行宮古跡一の谷半腹に鐘かけ松と云あり、須摩寺に至る、上野山祥福寺といへり、眞言宗、二王門義經馬盃の額あり、左の方に若木の櫻、寺前に神功皇后釣竿の竹、義經の腰掛松傍に鐘あり、銘は攝州矢田部郡丹生山田庄平野安養寺鐘とあり、鐵拐ヶ峰に掛て有りしを源豫州軍終て後士卒に命し此所にかけしといへり、故に一の谷に鐘かけの松あり、一丁程西に敦盛の首塚あり、寺の什物は敦盛赤旗、名號母衣結の名號、何れも黒谷法然上人の書、熊谷直實書する處の敦盛の鐘像、敦盛幼少



の内  
竹  
行  
一〇六

の手跡の和歌、同鑑同高麗笛、漢竹の笛ともいへり、青葉笛辨慶若木櫻の制札等々、客殿右の方に敦盛の木像を安置す、六百年前の梯目前にして感慨に堪たり、境内より紀の浦々淡路島播磨瀨を觀し頗る寂條たり

○淋しさのいつかはあれと須磨の浦

もしほのけむり松の夕風

夫より東須磨と云處に松風村雨の墓あり、程なく路傍左の方に並松二丁計民家を経て長田明神の社あり、鳥居の額は小野道風の筆境内石燈籠は村上天皇の御寄附之といへり、甚大社なり、兵庫に達す、大阪と西國と商船都會の地にして繁榮此所に集る、當所に宿す、旅店榭屋長左衛門道を取事十一里。  
五月朔日乙卯天氣吉

明半頃出立兵庫西南を築島と云又一名經ヶ島ともいへり、平相國清盛の石塔あり、右に時宗一遍上人示寂の舊跡眞光寺といふ大寺あり、(建治元年一遍始開時宗遍字知眞河野七郎通廣之二男也と原文に註せり)築島來迎寺是亦大寺之、抑相國入道(治承四年六月清盛遷京於攝州福原養和元年春閏二月清盛薨年六十四葬攝州經島と原文に朱註せり)此地を築く事民の煩ひをかへりみず、唯威に誇る悪行には似たれとも、末代天下の至寶にして島々入江田地となり、人家も増殖し諸國に船の煩ひなく、交易盛に行る、其功誠善行なりといへり、偕此津を築く條は、攝津和田の崎難波の浦は往還の海門天下運送の要津之、平家の威勢萬國に及ふといへとも東國の八平氏關奥の夷賊に恐れあり、こゝを以て清盛かたく思ひめくらし京畿をはなれ、要害の府城をかまへ子



孫長久の地を考ふるに津國福原より勝れたるはなし、たとへ君臣の禮そむくとも中國西國の人々さへ心かはりだになくは、須磨の關をかため葛葉山山崎の大城戸を閉て、船路の通路を專とせんとするに、兵庫難波崎とて船の泊悪敷處なれはいづれの風にもつなく處なし、鳴門の潮先を切て島を築て兵庫を湊となし、難波入江の高淵をおし流し、江口神崎へも心よく廻船を入茨木長柄總して攝河兩國の水路をよくし、淀一口鳥羽河内の沼ども干あかる程ならは田畠に利あり、淀川の水をよく利せは、高瀬の往還わすらひなく、畿内の繁昌寶島となるへしとて、是を胸肩氏國器用方便をかり斐コノミの忠治郎子妙典の門司の藤内紀四郎景則奉行として、長門周防丹波播磨紀伊和泉より役夫を出させ、飛驒の匠木曾の柚方總して内裏供御料所の正税といふとも御祭會料の

外に十分一の課役を取て、不日に成就せんと、應元元年二月八日に築き始め過半成就の所に、八月に至て大風大波立て一夜に是をゆり失ひ跡方なくなりけるか、又三年の彌生阿波民部重能を奉行として終に成就すと舊記に見へたり、人〇の事は奉行頭人諸役人大工鍛冶石工船役の者まで怠りさせましきとの清盛か旨一つにありて大功はなしたる、其勢ひにあらすはいつか成へきの時あらん、實に莫大の鴻業にして、今も兵庫の里俗清盛様と尊信すといへり、町を出て湊川なり、十丁程行街道より二丁計左坂本村田圃の中に楠正成の碑あり、水戸黄門光圀公建る所にして家臣佐々木助三郎奉行し、石面に黄門公の筆にして、嗚呼忠臣楠子之墓とあり、裏には明の徵士舜水の文あり、碑石は和泉敷石は攝河にして、三國の石之塔中石櫛に圓鏡一面を藏め、楠正成靈



光圀造立としるしたると、楠の木像も安置したり寺は醫王山廣巖寺といへり、建武三年五月廿五日楠公の一族七十二人二行に居並ひ一同に切腹せしといへり、其遺骸は今の石塔の地に葬りしといへり、本堂の聯板に開山佛日焰惠禪師明極和尚示寂建武三年九月二十七日楠正成戰死建武三年五月廿五日四十三歳とあり、生田に至る生田明神の社あり、大社にあらずといへとも神馬堂繪馬堂無殘經營にして、拜殿本社結構なり、社前左の方に敦盛の萩ゑびらの梅右に梶原の井等あり、社の傍より道を左に取一丁計にして生田川あり、水源は布引の瀧より流る、十二丁にして、布引の瀧に至る、此所より摩耶山への道ありて標石を立ち、布引の瀧高さ二十四丈にして、一筋に瀧壺まで落る有様さなから布をかけたること、殊に南面すれば兵庫尼ヶ崎難波の浦

まで廻眸の内に、鮮にして絶妙の景地なり

○立ぬはぬ天津乙女の夏衣

かけてそさらす布引の瀧

此處より山路を上下して谷上村に出、からとを過て有馬温泉に達す、入口に清朝人の書にして日本第一の靈泉と云碑あり、客舎兵衛喜右衛門行程六里半。

二日天氣吉

同日逗留温泉に浴す、當所の温泉は海内に冠たる事世の知る所にして、欽明天皇三年始攝州有馬温泉涌出と原文に朱註せり、諸病に功驗いちしるしく中風瘡毒には禁忌なりといへり、浴する事生質の健否に依て増減ありといへとも常人五度を以て限とす、浴室三ヶ所にして沸騰の勢甚しく味別て鹹し、實に無類の名



泉なるへし

○いつまでもかきりはさらにあらかねの

土の出湯のさむる間そなき

南の方に薬師堂湯神堂あり、民屋五百軒餘旅舎よろしく、竹細工  
挽物鹽山椒等を産す。

三日天氣晴明

明半時旅装を束ね出宿舟坂村を過て生瀬に至る、此間山路川に  
沿て下る、兩邊巖峨々と聳へ景地なり、小濱に達す此處一橋様御  
領處なり、此處より田野ひらけ平坦なり、こやに至伊丹を左に取  
深田村を過、程なく尼ヶ崎への別れ道有て標石を建たり、道を左  
に取神崎に出此處官道なり、神崎出口川有舟渡し之、壹里にして  
十三に至る、入口に十三川あり是又舟渡し之、此處より阪城巍然

として見へたり、大阪に達す、旅亭平野屋左吉行程八里。長堀橋堺町筋と云へり

四日天氣晴明

同日阪府より泉州堺を一見す、五ツ頃亭を出先日、本橋の詰より  
道を左に取高津の宮に詣す、八十七仁徳天皇を祭るといへり、右に稻  
荷の社左に神輿堂神殿の傍に高臺の頌と云碑あり、高き屋の御  
製を刻して立たり、阪府一眸の裡に鮮にして佳景之、四丁程南に  
生玉の社あり、右に本地堂あり、極彩色にして經營尤よろし、夫よ  
り四天王寺に達す、(用明天皇二年厩子皇子聖德太子建天王寺、及ひ正  
慶元年秋八月楠正成詣天王寺開秘府見未來記と原文に朱註せ  
り)聖德太子守屋誅戮以後の御創造七堂伽藍にして佛法最初の  
御寺なり、本堂の前に石の舞臺右脇に龜井の水あり、寺領千五百  
石道を右に取一、心寺といふ寺あり、寺内に本多出雲守石塔あり、



南の方に茶白山御陣場あり、天下茶屋に出村を過て左の方に岸の姫松あり、少し小高き所一村の松原を云へり、攝州一の宮住吉四所の社へ詣す、街道左の方に石の大華表左右繪馬堂諸國より寄進の石燈籠連綿たり、四の社三の社夫より二の社次に一の御本社之、右に楯の社おもとの社神樂堂其外末社多く、左に神輿堂神庫神馬堂社内廣大にして神威晃々たり

○跡たれて其名もしるき神垣の

松風すゝし住吉の濱

五丁程西の方海面に燈籠あり、濱の燈籠と稱し海上安全のため又且渡海の目當とす、社領二千六十石神主津守某、三丁計行て安兵町東側に難波屋笠松といふ有り、偃蓋の如く枝葉繁茂して殊に風流なり、此地往復の遊客駕をとめすと云事なし、九丁南に

攝泉の境にして大河之橋を大和橋といへり、堺に達す町中程東の方へ壹丁程入り妙國寺なり、日宗にして庭前の蘇鐵は世のしる所の海内一なり、根の廻り貳丈五尺大枝壹丈貳尺長さ貳丈餘織田侯の詠あり

○妙なれや國にさかゆく名木の

聞しにまさる一本のかふ

寺領百二十石、夫より堺の波濤に至る、西面に淡路島又島を遙望し、左は紀州崎右は西の宮より尼ヶ崎兵庫須磨の浦々を觀し、大洋限りなく商船輻湊の地にして四民軒をならへ功用多らすといふ事なし、殊に鐵器を製する者三十六家、其他の鑄匠枚舉しかたし、世に名高き國産之、此處より旅亭へ戻る

○なかめこしたくひも波のほのくくと



難波の浦の曙のそら

五日天氣晴明

五つ時出宿、農人橋より御城廻り、眞田出丸に至り、天満橋を過て天神宮へ詣す。此邊去る、大塩一亂の節、宮殿を始め民屋數千軒焼失す、依て新たな御造營にして結構を盡せり、西門跡より座磨の社、木津川の大湊に至る、淀川の下流にして諸國の廻船大小の商船幾千といふ數をしらす、阿彌陀ヶ池に至る。是難波の地なり、四ツ橋にかゝり旅亭に戻る、御城代信州上田松平伊賀侯、暮少々過舟を雇、淀川を上り、早天橋本に着船す、舟路八里。

六日天氣吉

同朝橋本の茶店にて休憩し、山崎の渡し、神龜三年釋行基造山崎橋と原文に朱註せりを越て、山崎離宮八幡に詣す、社領千石至て

古社之、壹丁程東の妙喜庵といふ寺あり、天正十年六月豊太閤此地にて明智光秀と接戦の砌、當寺に於て千の利休茶を呈上せし數寄屋あり、軍卒に令し一夜御造營ありといへり、三疊隅爐なり、此茶室にて合戦機密の御談話有しといへり、御座の間の床は狩野永徳の山水の畫なり、庭前に袖すりの松と云あり、妙喜庵の額は東福寺南周和尚の筆なり、寺僧應接して叮嚀を盡せり、寶寺に至る豊太閤の御本陣此處之、右に三重の塔右の方より天王山への坂路ありて石の鳥居あり、觀音寺へ詣す、境内觀喜天の社あり、左に東照宮の御宮鐘樓在り、鐘は異形にして余の鐘にかわれり、夫より橋本へ戻り四丁程にして八幡への道あり、坂路十六丁にして男山八幡宮なり、清和天皇貞觀元年八幡移山城男山と原文に朱註せり、石の鳥居二ノ門廻廊は二十四間四方拜殿本社極彩



色間に渡せる水樋黄金にして渡り十三間廻り三尺五寸結構言語に絶す、左右に多寶塔右の方坂中程に石清水八幡の社あり、社領七千七百石

○幾千とせ御代を守りの男山

動かぬ國の例し久しき

夫より道を左に取津谷村といふあり、舟渡しの川あり、是大和木津川の下流之、廣野新田にかかり、宇治へ達す、世にあまねき茶の産所之、平等院に至る、左の路傍に縣明神の社あり、平等院へ詣す、本堂の向に鳳凰堂といふあり、宇治關白頼通公の御建立、永承六年建立と原文に朱註せり、にして頗る大禪刹なり、然れとも甚破壞して見へたり、左の方に源三位頼政公の五輪あり、法名建法津山頼圓治承四年とあり、頼政年七十五と原文に朱註せり、二丁程

東の方に扇の芝とて頼政自盡の處にして一株の松井に碑石等あり、宇治橋(孝德天皇大化二年元興寺道昭始造宇治橋と原文に朱註せり)をわたり朝日山惠心寺に至る、惠心僧都御法最初の寺にして傍に離宮明神の社あり、三室戸へ詣し黄檗に至る、初の門に第一義の額山門樓上黄檗山、下に萬福寺佛殿、に大雄寶殿各隠元禪師の筆にして、日本黄檗の開闢寺領四百石頗る大禪刹にして目を驚かす、伏見六地藏に出御香の宮へ詣し藤の森天王に至る大社之、社領二百石夫より京の稻荷へ達す、元明天皇和銅四年崇稻荷大明神於山城國紀伊郡と原文に朱註せり、日本稻荷の總社にして、經營甚結構を盡せり、社領百七石、東福寺に至る通天橋紅葉の名所にして秋の頃は騷客夥し、瀧の尾に詣し旅亭へ着す、客舎六角堂前筑前屋治郎左衛門行程八里。



七日朝の間少少雨降間もなく晴

同朝上田三英來訪し故國の情を述談話時を移す村山玄杏下午より來訪し同く別後の情を述一同亭を出て祇園へ詣す四條(寶德四年造四條大橋と原文に朱註せり)より祇園新町の遊里を過西の門より入此邊洛陽第一の繁華なり祇園は頗る大社にして社領百四十石(貞觀十一年遷祇園山城愛宕郡と原文に朱註せり)南の門を出軒茶屋を過清水寺に至る大同二年坂上田村麿の建立之(延曆十七年秋七月將軍坂上田村麿造清水寺と原文に朱註せり)奥院地主權現田村麿朝倉堂三重(?)堂音羽瀧境内廣く櫻數樹ありて花の頃には猶更騒客日日群集す社領百三十石夜に入寺町通より亭に戻る。

八日天氣吉八つ頃大雷霰降間もなく快晴

同日五つ頃出宿本能寺に至る寺内に織田信長公の塚あり(寛仁二年釋行圓建草堂號行願寺天正十年六月二日明智光秀弑信長於本能寺信忠於二條新殿と原文に朱註せり)草堂より百萬遍に至る智恩院と號す夫より吉田へ詣す日本六十餘州の神神を勸請し諸國の神祇官當所吉田殿より出す社領七百六十石眞如堂に至る寺領百五十石黒谷に達す浄土宗四ヶの本寺之(建曆二年正月黒谷法然源空寂建永二年秋九月熊谷直實法師蓮生寂黒谷と原文に朱註せり)法然上人の開基熊谷堂敦盛熊谷の石塔左の方に山崎闇齋の塋あり境内に紫雲石紫雲山金戒光明寺といへり寺領百五十石詩仙堂に達す石川丈山隱遁の古跡之俗稱石川嘉右衛門其性頗英傑にして神君の近侍たり大阪軍役の砌諸軍に魁して神君の不興を蒙り洛の東山に隱居す漢晋唐宗の名家



三十六人の詩選あり、畫は狩野探幽の眞跡にして本朝三十六歌仙に擬す、勅に依て名所に入四方の文雅至らすと云事なし、銀閣寺に至る東山義政公の宅地にして風流の庭なり、二重の銀閣あり、東求堂とて義政公經營の茶室あり、是茶室の始なり、永觀堂より南禪寺に達す、臨濟派にして五山の上なり、龜山法皇の皇居なりしを、開山大明國師に給ふといへり、寺領千石、智恩院に達す、淨土宗總本寺元祖圓光大師宗風開發の靈地にして本堂始寺中都て奇麗を盡し、愉旨頂載の間、宮様御成の間等古法眼元信の畫、狩野累代の能畫又は土佐家の畫善盡し、美盡せり、寺領七百石、圓山に至る僧坊多く景色よろし、夫より長樂寺に達す、是又洛陽を眼下に觀し甚佳景、少少南に行て東大谷親鸞上人御廟處、双林寺西行詣安井御門跡を過て高臺寺に達す、太閤北の政所御建立

寺の亭時雨の亭等甚風雅にして、寺内萩多く秋の頃は貴賤遊樂すといへり、八坂の塔、白鳳七年秋八月建八坂塔と原文に朱註せり、人皇百八を過て清閑寺、一説十四年歌の中山といふ、夫より大佛殿方廣寺に至る、後陽成院御宇天正十六年豐太閤建立し秀頼公相續して再建し、本尊坐像高サ九間五尺堂の南北四十五間〇の廻り凡三間外面石垣三間程の大石にして廻廊南北百二十間東西百間日本無双の大堂なりしか、惜むへし寛政十年七月二日雷火の爲に燒失す、鐘樓は猶残りて鐘の高さ一丈四尺渡り九尺東の方に三十三間堂あり、後白河法皇御願として千體の觀音、崇徳院長承元年春三月上皇建得長壽院造三十三間堂安置一千一體金佛と原文に朱註せり、を安置す、矢員場にして諸家藩士の額面數多あり、傍に耳塚あり朝鮮征伐の節耳を持來り埋しといへり、道を六條通に取



兩門跡へ詣し歸宿す。弘長二年冬十一月一向宗開山親鸞於洛五  
條西洞院寂頽齡九十と原文に朱註せり

九日天氣晴明

五つ頃出宿禁裏御所。仙洞御所廻りを拜見す。桓武天皇延暦三年  
六月始營山城國乙訓郡長岡都同十三年冬十月天皇遷幸新都詔  
以後平安城と原文に朱註せり。御築地南北八丁東西六丁四方九  
ヶ所の御門御所の南北九十八間東西百二十五間。東の御門を日  
の御門南を南門西を公卿門といふ。御臺所御門は公卿門の北に  
あり。御門内紫宸殿の廻りに廻廊あり。正面を承明門東の御門を  
日華門西を月花院といへり。此處常の雜人通行をゆるさず。仙洞  
御所は南の方なり。五攝家清華方の邸宅相並んであり。西の陳を  
過て北野天滿宮へ詣す。天徳三年右大臣師輔公造立し給ふ。仁明

天皇承和十二年菅承相降設昌泰元年任右大臣延喜元年春二月  
被讒左遷大宰權帥同三年春二月薨于配所歲五十九延長元年詔  
燒左遷宣旨復本官贈正二位天曆元年秋九月以菅相亟廟始移立  
北野同九年春三月稱天滿天神正曆四年夏五月贈太政大臣正一  
位勅使下筑紫安樂寺宣詔神託詩曰昔爲北闕被悲士今作西郡雪  
恥屍生恨死觀其我奈從今望足護皇基と原文に朱註せり。洛陽社  
にして神威日々に新なり。社領五百八十石別當松梅院。道を西に  
取衣笠山。延文三年四月正二位前大納言尊氏薨歲五十四葬衣笠  
山麓號等持院と原文に朱註せり。を右に見ならひか岡への道あ  
り。足利累代の廟所等持院を過て龍安寺。細川右京大夫勝元建  
立にして寺領三百九十石境内に池あり。冬の頃水鳥多しといへ  
り。妙心寺に達す。禪宗五山の外大徳寺を以て大寺とす。坊宇多く



寺領四百八十石仁。和寺。宇多天皇仁和四年秋八月造門跡之始也。と原文に朱註せり。御室の御所に至る、東の方に五重の塔御宗領千五百石境内櫻多く花時には洛中洛外の貴賤群集す、鳴瀧を過て廣澤池東西五丁程南北三丁程月の名所なり、嵯峨清涼寺に達す、本尊赤構檀。永延元年釋齋然自宋朝歸朝特來釋迦尊像と原文に朱註せり。天笠昆者羯摩の作釋迦如來の尊容寺領九十七石寺中に百萬の塚あり、愛宕山を右に取二尊院に詣す、小倉山。是之、麓の右の方に定家卿爲家卿御舊跡あり頗る幽寂の所之、厭離庵と云へりと原文に朱註せり。道を東に取野々宮を過て天龍寺之、五山。至德二年七月將軍義滿定五山之列位一、天龍寺二、相園寺三、建仁寺四、東福寺五、萬福寺と原文に朱註せり。の第一にして寺領千七百五十石。曆應三年足利尊氏建天龍寺以疎石爲開山夢窓國師。

是也と原文に朱註せり。夫より嵐山に至る、麓に桂川の流ありて橋をわたせり。渡月橋。といへり、河邊に三軒屋の茶亭あり花の頃には文雅騷人遊宴す、路傍右の竹林に小督の柴の扉の寺あり、小督の墓は一堆の塚に楓一株を植たり、橋を渡り法輪寺に達す。和銅六年建嵯峨郡と原文に朱註せり。虚空藏を安置す寺領七十石、加賀利家卿御内室芳春院の御再建といへり、松の尾に詣す、祀る所大山作神市杵島姫の二坐にして社領九百三十石夫より梅の宮に至る、四坐の神にして橘氏の祖神といへり、四條通へ出て旅宿へ戻り齋藤定之進の招請に依りて二條御役所に至り、深更に及ひ歸宿す、二條所司代若州若狹侯御町奉行田村伊豫守殿。守遠江殿。十日天氣晴明。五つ頃出宿、二條御城廻りより紫野。大徳寺に至る、後醍醐天皇の



勅願所にして大燈國師の開基。一休和尚居住せられ、文明三年冬十一月大徳寺一休和尚寂壽八十八と原文に朱註せり。四十二院の坊中あり、寺領二千四十石。長保三年夏五月祭疫神於紫野今宮是也と原文に朱註せり。今宮に詣し鹿莊寺に至る、應永四年足利將軍鹿苑院義滿公造立金箔を以て三重の樓閣を粧ひ、應永十五年五月大相國義滿薨歳五十一號鹿苑院と原文に朱註せり。後小松院の宸翰窟竟頂の額あり、西山金閣寺是之、數寄屋にはなんてんの床柱前には池水をたゝひ、衣笠山を眺望し、奇觀たくひなし、平野へ詣し北野千本通りより壬生寺へ詣て、島原の遊里を過て大通寺に達す、源義基公の靈廟にして六孫王權現と崇る、寺領二百八十石東寺に至る、延暦十五年東寺建と原文に朱註せり。護國寺と號し桓武天皇御宇弘法大師開基にして眞言宗の源之、右の

方に五重の塔あり高さ二十九間羅生門は都の南大門といへり、寺領二千三十石、夫より御願堂錦の天神へ至る、誠心院へ達す和泉式部の墓、軒端の梅あり、旅宿へ戻る、遊佐岱三郎武者廣人上京し郷書を達す。

十一日天氣晴明

同日齋藤氏より招請に依て五つ頃より西御役所に至る、一條正直來訪し饗應頗る懇切にして夜に入歸宿す。

十二日天氣晴明

同日京地出發郷友族亭へ來訪し離杯を取て送別あり、旅裝を束ね晝九つ頃出立下加茂に至る、欽明天皇二十八年加茂葵祭始と原文に朱註せり。天武天皇白鳳五年の建立にして祀る處御祖の神右の方に糺の宮あり、社領五百四十石、十八町西にして上加茂



に詣す、當國一の宮之、社の結構後に山の形うるはしく、前に川の  
 流れいさぎよく、神威日々に新にして誠に王城鎮護の靈社之、本  
 社分雷の神社領二千七百石、市原といふ所を過て關寺小町の舊  
 跡小町寺あり、貴船に至る、藏原伊勢人の建立といへり、鞍馬寺に  
 詣す、延曆十五年の創舉坂路十丁計にして義經兒童の時住せら  
 れし東坊寺の宅地の跡あり、(承安四年春三月義經出鞍馬寺赴奥  
 州と原文に朱註せり)僧正ヶ谷には義經劍術手練の所之とて岩  
 角に刀劍の跡おびただし、本堂は燒失して假殿計之、寺領二百二  
 十七石、當所に宿す、客舎大坂屋喜右衛門行程四里。

○所から都の空に安くかれて

はし居に受くる夏の夜の月

十三日天氣晴明

明半頃出立、道を左に取賤原小原を過て、矢脊の里に至る、若州へ  
 の道あり、此處叡山への登り道にして入口にはせ出しの茶屋と  
 いふあり、山上迄坂路五十丁之、十二丁程登り左方に元黒谷青龍  
 寺間もなく城州近江の境なり、四五丁登り相輪塔王城の鬼門柱  
 是なり、釋迦堂開山傳教大師大師堂、延曆七年僧最澄始開比叡山  
 延曆寺建根本中堂澄者則傳教大師也同十三年成ル號一乘止觀  
 院と原文に朱註せり、辨慶水戒槍堂、弘仁十二年夏六月勅築戒壇  
 と原文に朱註せり、大講堂、根本中堂、横川は左の方にあり、當山は  
 日本五岳の一にして、桓武天皇延曆七年傳教大師舉創王城鬼  
 門鎮護の靈場之、寺領五千石、四明ヶ嶽は右の方絶頂にして晴天  
 には駿の富岳を望むといへり、坂路を下り中頃に要めやとりと  
 云所あり、湖水扇のごとく、孝靈天皇五年江州地圻水始涌と原文



に朱註せり唐崎の松を望む麓は山王の社大宮(天武天皇白鳳二年建大宮社江州坂本郷と原文に朱註せり)聖眞寺、客人宮、八王寺、三の宮、二の宮、十禪寺合せて七社なり、天智天皇七年志賀郡建崇福寺號志賀寺と原文に朱註せり、波止土院に詣し、坂本町に出道を右に取唐崎の松に至る、唐崎明神の社あり、松の圍み三丈、枝葉四方に繁茂して、南北三十八間、東西三十間に及び、翠色鬱蒼とし、蟠龍の勢ひを顯はし、無双の名木なり、志賀の舊都志賀寺等の古跡は左の方にあり、三井寺に至る(寛平三年冬十月三井寺開山圓珍寂年七十八謚智證大師と原文に朱註せり)觀世音の社前より矢走、唐崎、堅田を眺望し、絶景之本堂より奥の院に至る、傍に梵鐘あり、俵藤太蜈蚣退治報謝に龍宮より得しといへり、甚異形なり、同傍に三井あり、天智天武持統の三帝御誕生の砌此れを以

てうぶ湯に奉りしより三井寺と云しと之、今改めて圓城寺といへり、大津に出つ、驛中右に精大明神の社あり、天智天皇六年春三月遷都近州大津と原文に朱註せり、札の辻は京師への別れ道之、當所は京師の咽喉都會の驛にして大に繁昌し、商屋軒をならへ功用足らすといふことなし、當所より乗船し膳所を左に過城は水面に築出し、天守櫓の形勢甚拔群なり、城主本田下總侯采邑六萬石、粟津松原(元暦元年正月義仲敗死江州粟津と原文に朱註せり)を左に取瀬田を過ぎ石山に達し宿す、旅亭松屋勘七行程七里。

○唐崎や一本松をしほりにて

矢走に歸る浦の友船

○夏今宵いつくはあれと鳩の海や

ささ波かけてすめる月影



十四日天氣清明

明半頃出立石山寺に詣す、本堂觀世音正面の額は當寺伽藍は江州北郡淺井備前守息女禿賴卿母堂爲二世安樂再興也とあり、傍に紫式部源氏の間硯等寶物として開帳す、式部越前守爲時之娘母常陸介爲信女也初號藤式部其性聰敏直和漢史籍善詠歌藤廼佛理嘗在石山寺撰源氏物語若干其言效莊子寓言以假爲眞然筆端鼓舞之妙於國字粧撰之中最奇勝也就中若紫之卷詞言妙絕故改賜名於紫式部時人稱日本記局正曆三年卒と原文に朱註せり塚は二三丁奥の方にあり、庭前の奇石佳景之、左の方高き所に別亭あり、瀬田の二橋より湖水を觀し眞妙の奇景之、夏至の頃より洛中洛外の男女螢狩に群集し、舟にて瀬田川を逍遙しその賑ひいはん方なし、勢田をわたり江州一ノ宮建邊の社あり、大江村新

田を過て街道左の方に野路の玉川あり、田圃の中に跡のみ存して歌一首を石に刻して建たり、草津の驛に至る、左に矢走への別れ道あり、宿の出口に東海道中仙道の別れにして標石を立てたり、道を中仙道に取、守山に至り宿を出て安智川かちわたり之、右の方に三上山あり此處遠藤但州侯一萬石の領所なり、篠原と云所あり、本藩大守公御領分之、文治元年六月誅宗盛及清宗旅江州篠原と朱註せり、屋棟川を過て鏡山に至る、街道右脇にあり、横行川を過て、武佐に達す、宿を出て西生成と云處是又御領所之、清水崎神谷小畑を過て、越智川に至り宿す、驛入口に越智川あり、旅舎藤屋幸右衛門行程十里。

○山の名の鏡にはれし夕附に

かゝやくそらはくもるともなし



十五日天氣曇晝より風吹夜に入雨降

明六つ時出宿出橋枝村つうやを過て高宮に至る入口に高宮川あり高宮布を産す驛中右の方に多賀神社石の華表三十丁にして多賀の神社當國の大社之左の方に阿彌陀堂あり美麗莊嚴なり別當不動院又三十丁にして街道に出左の方に彦根の城みゆる鳥居本に達す此間に小野の細道と云あり其實地はふます町中左の方に彦根道あり驛を出三丁程過て中仙道北陸道の別れ道あり文武天皇大寶二年始開美濃國岐蘇山道と原文に朱註せり道を北國に取梅原を過て米原に至る此處より大津への出船ありいかり高はしと云を過て長濱之此處よりも大津彦根竹生島景行天皇十年江州竹生島始生と原文に朱註せり等への出船ありて甚賑へり昔の城跡は町の左の方にあり此邊養蠶を業と

すとみへて能桑を植えたり○村大谷早見の村を過此邊右の方に淺井備前守長政の城跡小谷の庄の間近く見えたり高付千田の村にかゝり木の本に達し宿す北國屋泰助行程十二里

十六日朝の間少々雨降五つ頃より稍晴

明半頃出立驛の中頃右の方に木の本地藏跡あり町を出て左の方餘吾の海賤ヶ嶽諸將砦の跡あり天正十一年夏四月秀吉發兵與佐久間盛政柴田勝家戰志津嶽柳瀬北軍大敗と原文に朱註せり中川瀬兵衛清秀戰死の場所は街道より十丁計左の方にして賤ヶ嶽續きの尾崎之木下小一郎秀長堀久太郎秀政等の砦の跡は街道右の方なり中の郷東野大谷の村々を過て梁ヶ瀬に至る此所より福井侯御領所にして町出口に關所あり椿市の驛を過椿坂といふ有り峠を越て中河内に至る宿より一里半にして枳



木峠といふ所あり、此所近江越前の境なり、板取に達し孫谷落合の村を過て左の方に敦賀若州への別れ道あり、今庄に着し宿す、旅亭長濱屋九右衛門行程十里。

十七日天氣吉

明少々過出宿驛を出て間もなく湯の尾峠といふあり、峠の茶店にて疱瘡の守を出せり、峠を下りて湯の尾へ、街道右の方に木曾義仲の城跡あり、鯉江、脇本、今宿の驛を過て右の方高山に日野權現の社あり、越前に入り山林樹木繁茂し此邊より田圃もひらけたり府中に達す、福井侯御附家宰本多内藏之助殿采地二萬石、驛中大に繁昌せり、邸宅は驛中比右の方にあり、鯖江に至る、入口に川あり舟渡しなり、日野川といへり、上鯖江を過て、下鯖江へ、領主間邊下總侯采邑五萬石城は左の方に有り、城下は寂條として府

中杯比すへきにあらず、水落に至る路傍左の方に神明の社あり、麻生津を過て北の莊は街道五里程右に當れり、赤坂鳥羽新町を過て、福井城下之町中に川あり橋をわたり左の方に城あり、松平越州侯采封三十二萬石、此處より曹洞本山永平寺、建長五年曹洞宗祖道元寂年五十四と原文に朱註せりへ三里あり、舟橋に達す、入口に川あり、九頭龍川といへり、四十七艘の舟橋を掛たり、當所に宿す、客舎素麵屋庄右衛門行程十一里。

十八日天氣晴明

明半頃出立、〇崎に至る町中頃より一丁右に入左中將新田義貞の靈廟あり、驛を出て右の方に丸岡の城下見ゆる、采地五萬石有馬左衛門侯五本村を過、金津に達す宿を出て柿原といふ村あり、二丁程行て嫁おとしと云處あり、むかし武家の嫁念佛宗へ歸依



し日毎に吉崎の御坊へ參詣しけるを姑ふかく妬みある時面を掩ひ異形の躰に出立、此所に来り嫁の通りをおひやかしけるか、嫁は佛力の擁護にや少しもおそるゝ事なく、却て姑の掩ひし面皮肉に付て、さらに放るゝ事なし、詮方なくよし崎の御坊へ至りひたすらに罪を懺悔し、發心して念佛道に入たるよし近代標石立たりと里人の物語りなり、蓮浦といふ所より舟に乗右に吉崎左に濱坂を過ぎて、鹽屋といふに至る、越前の湊にして堀口といへり入海にして景地なり、此所より川舟にて登り大聖寺に至る、陸地にては細呂木と立花の間越前加賀の境、舟路にては吉崎より加州へ、三里にして大聖寺城下中程に着船し、城は町の左の方にあり、城主松平備州侯采邑十萬石城下甚よろし、城下出口に岩津明神の社あり、さくみを過て、いぶり橋へ、驛中左の方に山中

温泉への道あり、宿を出て右の方に白山半腹より以上雪を帶たり、此邊高山都て嶺上に雪残り、月津の驛を過て久志と云處あり、小松へ達す入口に多田八幡の社新田義貞の願狀實盛の甲冑等あり、小松は加州侯持にして頗る繁榮の城下なり、旅亭林屋壽門行程十二里半。

○おくれしと野澤のしみつせき入て

とる手ひまなき賤か若苗

十九日天氣晴明  
明半時出宿、小松の驛西の方に安宅の關の跡あり、濱邊なり寺井栗生を過て川あり、舟渡しにして手取川といふ大河へ、川幅二十丁出水の節は湊へまはる、然れとも此節水甚涸れたり、水島の驛を過てふとみ村にかかり、柏野、松任、野々市の三驛を過て、金澤に



達す、城は右の方にあり、城下中頃に犀川と云ふあり、城下は九十  
 丁餘にして甚長しといへとも結構ならず、藩中一通以上といへ  
 とも嘗て絹布を用ひず、至て素服なり、國禁質素嚴重とみへた  
 り、越中越後の境に至り加州侯番所あり、全府町役よりの印鑑を  
 所持せされは通行をゆるさる國法なり、依て當所より持參す、  
 四月十七日二千軒程焼失せり、柳橋森本今町二日市と焼き町、中  
 條等の村村を過て、つばたに至り宿す、今晚亦以金府大火千軒餘  
 焼失のよし翌朝聞て、當驛に寓りし事旅中の大幸と同行申合へ  
 り、旅亭油屋清左衛門行程十二里。

二十日天氣晴明

明半前出宿、松の瀬坂といふ有り、竹の橋の驛を過て栗から峠な  
 り、壽永五年夏五月平家與義仲合戰加越兩州境砥波山平軍敗人

馬悉沒、貝利伽羅谷と原文に朱註せり、木曾義仲牛の角に松明を  
 結付て、大勢の敵を追落せし古宿、坂路一里半程にして左の方  
 に俱利伽羅明王の社あり、此處加賀越中の境、峠を下り石坂村  
 はるふ村八幡の社あり、今動木の宿に至る、相應の驛、此處より  
 乗船しおやべ川と云を下り、四里にして、高岡に着船す、此驛頗る  
 繁榮にして商家甚よろし、宿を過て大門と云所あり、中程に川あ  
 り、舟渡しにして庄川といへり、小松に達し宿す、稻住屋彌五右衛  
 門行程十一里。

二十一日天氣吉夜に入雨降

明半時出宿驛を出て追分といふ所あり、富山と岩瀬への別れ道  
 なり、道を右の方に取、富山の城下に至る、町に入間もなく神通川  
 の大河あり、六十四艘の舟橋をわたせり、日本第一の舟橋なり、城



は平城にして左にあり、松平雲州侯采地十萬石相應の城下なり、左の方に立山の高嶺半腹以上白雲を帶ふ、文武天皇大寶三年釋教與勸請立山權現於越中國と原文に朱註せり、六月朔日より七月晦日迄の外參詣をゆるさず、山の形勢峨峨として甚嶮阻に見えたり、新庄といふ小町を過、水橋に至る此處岩瀨よりの街道に落合り、舟渡しの川ありあまかせ川といへる湊なり、此所より海邊にして能登の崎より佐渡を遙に望めり、滑川に達す、驛を過て笠城川間もなく早吹川と云大河あり、各かちわたり、魚津入口にて、末の中越、西南水橋の方に當り、蜃樓を見たり、東海道桑名の海にて、名古の蜃樓とて、たまに見る事ありといへとも、此地にて見る事、旅中第一の奇觀、里老の物語にも甚稀なる事にいへり、魚津の驛甚よろし、宿を過てかた名川と云あり、此岸水無しと

いへとも是亦大河、ふせ川を過て、三日市に着し宿す、麻地屋新左衛門行程十二里。

二十二日雨降

五つ頃出立、浦山を過て黒部川といふあり、橋を合本の橋といへり、蜘蛛手なしにわたせり、いろは川ともいふ、上流四十八瀬あるゆへ、三日市より下道を通行すれば行程一里程近し、舟見の宿に至り町を過て小川と云あり、かちわたり、二た村を過て、泊へ達し、宮崎村を過界なり、此處に加州侯番所あり、金府より持參の通劃を出して通行す、出口に川あり、堺川といへり、是越中越後の界にして此所より高田領、玉貫村を過市振驛に至る入口に高田侯の番所在り、宿を出て一里程にして親しらすと云所あり、その間五六丁右は山峰峨々として、左は海面にして浪のさし引を見合



須臾の間に、通る浪立荒き時は、一步も進事不叶、北陸第一の難所、磯邊を行事二里にして、外浪なり間なく哥に至り二十丁斗りにして此所にも駒かへりといふ大難所あり、親しらすにことなからず、市振より海邊郡へ四里にして青海に達す、此間海邊砂地斗にしてよろしからず、民家石灰焼を事とす、入口に青海川あり、ちわたし、驛の入口左の方に大筒の○壇を構たり、高田侯海岸軍用の手當にして、當所より一里又は一里半程にして浦ことあり、當所に宿す、客舎渡部屋金兵衛行程十三里。

○そなれ松八重の汐かせ吹しほり

晴間もなみの五月雨のそら

二十三日天氣晴明

同日ひめ川出水舟留のよしに付、○○し四つ頃出立とふみつ澤

の村を過、ひめ川の舟渡しを越寺嶋より糸魚川に至る、松平日向侯祿地壹萬石町入口右の方に陣屋あり、おし上川ちわたり竹原大和川を過、鍛冶屋敷に達す、浦もと鬼伏、この浦を過て、能生の驛へ、宿を出間もなく右の方に能生の社ありて路傍に能生の汐路の名鐘といふ芭蕉翁の碑あり、此鐘いつの頃より有りしといふ事をしらす、汐のさす折にはさはらすして一里四方ひきしゆへ、此里にては海士の子も汐の差引をしれり、常陸坊追銘ありしか明應年中焼失し、殘銅を以て能登國中居の浦なる鑄物師に鑄させ、今に残せし由を記せり、程なく能生の泊り、百川藤崎つゝ石の浦々と過名立に至り宿す、此邊浦々風景よろし、旅舎岡崎屋、金右衛門行程八里。

二十四日天氣晴明



朝半前出宿なへのうら坂茶屋河原と云あり、夫より有馬川長濱の二驛を過五智に至る、路傍左の方に安國山國分寺と云寺あり、五智如來を安す、聖武帝天平九丁丑の開關にして弘化三丙午に至つて一千百九年之といへり、五丁計り北にして今町なり、商屋千餘商船湊の所にして賑ひり、五智村街道右の方に丸子山と云念佛宗の寺あり、此日高祖聖人の法會とて老若群集す、此所より田野ひらけたり、中屋布を過、高田の城下に達す、榊原式部侯采封十五萬石城は左の方にして平城之、大手向よろしからず、城下中頃に江戸奥州別れ道ありて標石を立たり、道を右に取信州路に赴き城下を出て茶屋町と云あり、新井の驛二本木松崎を過て關山に着宿す、村越宗兵衛行程十一里半。

二十五日細雨晝より快晴

明少々過出立右の方に妙香山と云高山あり、太田切、二股、小田切の驛化粧坂を過て、關川に至る町出口に高田侯番所あり、宿の出口に關川あり、今町の湊へ落る、此處越後信濃の境なり、野尻に達す、町の東裏に野尻の大池といふあり、高田邊より此邊積雪平年一丈餘にして十月頃より二月の頃迄人馬往來不叶といへり、野尻町出口より道を右に取戸隱山に至る小みちにして甚よろしからず、山原計りを行事五里此間民家さらになし、本社より奥の院へ三十丁女人を禁す、祀る所九頭龍權現別當實道院社領千三百石坊中三十六宇、東南の方に淺間か嶽みゆる、坂路を下る事四里にして善光寺に着し宿す、和泉屋平作行程十三里。

二十六日天氣晴明

同日明六つ時善光寺へ詣す、定額山と云へり、仁王門山門本堂大



伽藍なり、本尊右の方に本田義光義助等の三佛を安す、毎朝六つ時開帳あり、老若貴賤袖をついて群集し頗る大靈場なり、山門右の方に大勸進二王門の左に尼宮御殿坊舎四十六宇寺領千石旅宿へ戻り装束を束ね出立、大門前より道を右に取荒町に至る、此間町續き、東に筑摩川の流れあり信濃川とも云へり、新潟へ落る、平井村より牟禮驛、落陰村、大古間、柏原を過て野尻に至る、此處より行路元の如く、關山に達し宿す、旅宿前に同じ行程十里半。

二十七日曇晝より雨降追々大雨

明六つ頃出立、高田の城下に達し町中頃より道を右に取、春日新田に至る、左は關川の下流今町の湊なり、佐内福島を過て黒井驛に至り四つ居濱を過、片町に着宿す、伊勢屋清十郎行程十一里。

○豊年のためししられて今よりも

露おもけなる小田の若苗

二十八日雨晴風吹晝より天氣吉

明六つ時出立、鴈子直海の濱を過、かき崎に至る、此邊鹽焼を業とす、鉢崎に達す町出口に高田侯番所あり、上和村を越て峠あり龜割山といへり、判官義經加賀國戸樫の關を越此所を通り給ふ折北の方龜若丸を此地にて誕生あり、不安柳胞衣姫明神胞衣の池白糸の瀧なととて舊跡あるよし茶店に縁記あり、右に米山といふ高山みへたり、三輪笠島近江川の濱村を過高田領の堺あり、是より勢州桑名領なり、鯨波に至り下宿中濱より柏崎に達す、民屋三千餘商家多く繁昌せり、驛中に三國への別れ道あり、宿を出て程なく右の方長岡への街道なり、道を左に取安くた村安くた川の舟渡しを越て、荒濱に至り、宮川を過椎谷に達す、領主堀泉州侯



祿地一萬石居館は町の右にあり、旅亭蔦屋慶助行程十二里。

二十九日天氣吉

明半頃出宿、石地より出雲崎に至る、民屋柏崎より不足之といへとも商船輻湊し甚賑ひり、山田驛より五本七つ石おはたの濱村を通り、寺泊に達す、一里程にして街道より左に入弘智法師の行所あり、猿か馬場といふ峠を越て、海邊を放れ、田野曠々たり、勸音寺村を過、彌彦に至る、當國一の宮伊夜彦大明神、神領五百石、大社なりといへとも破壊したり、神主高橋兵庫介當所に宿す、客舎冥加屋多右門行程十里。

晦日天氣晴明

明半頃出立、石瀨村より岩室に至り、竹野町ぬのめ松山を過て、赤塚なり、驛中に赤塚明神の社あり、丸山より内野に至り十八丁に

して堺と云所より大西川を舟にて下り、舟路二里餘にして新潟に達す、信濃川の下流北越第一の大湊にして、商屋萬餘、大坂松前其他諸州の大船輻湊の地にして、繁華類ひなし、入口に白山の社あり、當所より佐渡へ舟路二十里、旅亭中屋與八行程九里。

壬五月朔日丁酉天氣吉夜に入雨降

朝五つ半頃旅装を束ねて乗船し、湊を左に取あか川と云に出つ、此川會津より落る、新川松崎を過、舟路五里にして木崎と云所に着岸し、堀割村にかゝり、新發田に達す、領主溝口伯州侯采邑五萬石、城は平城にして左の方にあり、城下は廣からずといへとも、田圃大にひらけ、地性もよろしく見得たり、城下出口に諏訪明神の社あり、右は會津道なり、社前より道を左に取かす川をわたり、加地に至り、宿す、客舎柳屋義平行程八里半。



二日曇四つ頃より雨降

明半頃出宿行路二里にして、菅谷不動尊へ詣す、靈驗日々に新なりとて老若群集す、別當菅谷寺社前に旅舎茶店あり、はこ岩越と云山道を通りはこ岩に出、横岡かな山かひやの村々を過、中條に至り此所より本郷通りと云近道あり、道を左に取本郷を過荒川と云あり、高野十二軒菅田の村々を過胎内川をわたり乙ナドに達す、二王門右に三重の塔左に鐘樓本堂、頗る廣大にして大尊大日尊天平十一巳卯草創にして當年に至り千百八年、別當乙寶寺寺領百石元の胎内川をわたり新保なはりかち山はるき山花立海月等の村々を過犬島驛に至、關に達し宿す、旅舎中橋屋庄吉行程十一里。

三日曇折々雨降

明半時出立、きら村を過て川有り舟渡し、川口と云所より山坂にしてありや峠といふ、落ふしと云所越後出羽の境にして番所あり、沼村より玉川驛に至る、此所に米澤侯番所あり出入をあらため印鑑を出せり、夫より小國に達し黒川村を過、市の野に至り宿す、此間始終山坂にして嶮難、旅舎越後屋新兵衛行程十里。

四日雨降雷聲あり夜に人大雨

明半前出立、白子坂、沼津、手の子に至る、此處は山坂、是より田野漸くひらけ平坦、松原小松の驛を過て鳴島もゝの川と云あり、米澤に達す、城主上杉彈正侯采封十五萬石城は中頃右の方にあり、城下市塵よろしからずといへとも、節儉を専らといよろしく國業を守るとみへたり、客舎遠藤喜六行程十里。

五日大雨晝より細雨



晝過出立、大澤の驛を過て右の方なめ川の湯へ別れ道あり、板谷へ達す城下を出て間もなく坂道にして大澤より此間板谷峠といふ、右の方に五色湯の温泉場あり、客舎佐藤與一郎行程五里。

六日天氣晴明

五つ頃出立、町出口に米澤侯番所あり、玉川番所より出せし印鑑城下にて引替右印鑑當番所にて相出し通行、産か澤に至り川あり、出羽奥州の境にして奥州信夫郡なり、此間山坂にして李平に達し、庭坂の宿に至る、入口茶店の脇より道を左に取大笹生にかゝり、飯坂に至り温泉に浴す、當所白川侯御領地、旅亭網屋長右衛門行程七里。

七日天氣吉夜に入雨降

同日五つ頃出立、川を越て湯の村なり、此所にも温泉あり、桑折に

出町西裏農家の後に本藩 満勝寺様の御廟所あり、梁川に達し宿す、桔梗屋喜八行程四里半。

八日朝より細雨

明半時出立、旅行出發の如く、丸森に達し、角田に至り宿す、旅舎本多屋平藏行程七里。

九日曇

同日五つ頃同伴各親族旅亭へ迎に來訪し、間もなく出宿、佐倉の舟渡し邊より段々引續郷友門生酒肴を携へ、綠陰子稻荷堂迄來訪し、別後の情を述情話時を移し、綠陰子利定の邸へ立寄相具に無事の歸着を賀し、八つ時過歸宅し、壽盞を採て祝酒を汲み、長途の無事を賀し畢ぬ。

○圓居してめぐりも盡す汲かはし



もよろこひの宿のさかつき

仙藩 砂澤三郎兵衛

爲胤

○うらやまし見ぬ名所も見るはかり

こゝろにうかふ水莖の跡

丙午紀行 後編 (地) 終

一、所經歷三十四ヶ國

陸奥、下野、常陸、下總、武藏、相摸、伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、伊勢、伊賀、大和、紀伊、淡路、阿波、讃岐、安藝、備後、備中、備前、播磨、攝津、和泉、河内、山城、近江、越前、加賀、越中、信濃、越後、出羽

一、經歷郡名

陸奥 伊達、信夫、安達、安積、白川  
下野 奈須、河内  
常陸 茨城、眞壁、新治、河内、行方、鹿島  
下總 香取、埴生、印幡、千葉、葛飾  
武藏 豊島、荏原、足立、高麗、橘樹、久良岐  
相摸 鎌倉、高座、大任、足柄  
伊豆 君澤、(可疑加茂ナランカ)



駿河。富士、庵原、駿河、有度、安倍、志太、益津

遠江。榛原、佐野、周智、豐田

三河。矢名、設樂、寶飯、額田、碧海

尾張。愛智、海部

伊勢。桑名、朝明、三重、河曲、奄氣、多氣、安濃、壹志、飯高、飯野、渡會、多度、

伊賀。山田、相野

大和。添上、湊下、平郡、葛下、高市、式上、東市、吉野、宇治

紀伊。伊都、海部、名草

淡路。津名

阿波。板野

讚岐。大內、寒川、山田、香川、阿野、那賀、多度、安藝。加茂、沼田、佐伯、安藝

備後。御調、沼濃、安那、奴可、沼島

備中。後月、小田、下道、窪谷、都宇、加夜

備前。御堂、上道、邑久、和氣

播磨。赤穂、揖西、揖東、飾磨、加古、明石

攝津。八部、兔原、有馬、河邊、西成、島上

和泉。大島

河內。丹南

山城。乙訓、葛野、愛宕、紀伊、宇治、久世、綴喜、相樂

近江。滋賀、栗本、野洲、愛智、蒲生、犬上、甲賀、淺井、伊香

越前。南條、今立、足羽、吉田、坂井

加賀。江沼、能美、石川、河北

越中。砥浪、射水、新川



丙午新行

信濃。水内

越後。頸城、刈羽、蒲原、岩船

出羽。置賜

總計百五十郡

一、府城

陸奥。福島、二本松、白川

下野。大田原、宇津宮

常陸。土浦

下總。高岡、佐倉

武藏。金澤

相摸。小田原

駿河。沼津、府中、田中

遠江。掛川

參河。大平、岡崎

尾張。名古屋

伊勢。桑名、神邊、津、安濃津、久居

伊賀。上野

大和。郡山、小泉

紀伊。和歌山、若山

讚岐。多度津、丸龜

安藝。廣島

備後。三原

備前。岡山

播磨。姫路、明石

攝津。大阪

山城。二條

近江。膳所

越前。鯖江、福井

加賀。小松、大聖寺、金澤

越中。富山

越後。糸魚川、高田、椎谷、新發田

出羽。米澤

總計四十六

一、驛路悉有卷中



内  
午  
新  
个



160  
94

Handwritten text on the right edge of the right page, possibly bleed-through from the reverse side. The text is arranged in several horizontal lines and is mostly illegible due to fading and the angle of the page.



